



9歳で日本に来られた時はどんな印象を持たれましたか。

とにかく不安でいっぱいでした。やはりことばの問題がいちばん大きかったですね。当時は学校で日本語のクラスなどなかったのですが、幸い担任の先生がとても熱心で、放課後に特別に日本語の授業をしてもらいました。2年くらいは友だちもなかなかできなくて辛い思いをしましたが、日本語が話せるようになると自然に溶け込んでいくことができました。

ただ、5年生になって級友から差別的なことを言われた時、自分が外国人であるということを知付かされました。その時の担任もとても理解のある先生で、**ブラジルの文化について特別な授業を設けてくれたおかげでクラスの雰囲気が変わりました。**

文化の違いによって、戸惑ったり困ったりしたことはありましたか。

日本に来た直後は、食事、特に給食が食べられなくてとても困りました。1カ月くらいは家からお弁当を持って行って、少しずつ食べられそうなものからトライしていきました。今も、子どもたちにとって給食は大きな問題になっていると思います。お弁当を持って行ける学校とダメな学校があるうえ、せっかく持ってきてもまわりの反応を気にして、結局学校で食べられないというケースもあります。味付けや匂いが日本の食べ物とぜんぜん違うためにからかわれたりするからです。大人にとっては些細な問題でも、子どもにとっては大きな問題です。

子どもたちは他に、どんな問題に直面していますか。

体育でみんなといっしょに着替えをしたり、プールに入ることに抵抗のある子もいます。先生にも温度差があって、ある年齢を超えたら日本語の修得は難しいので、本人は普通学級を希望しているのに特別支援学級に入るよう指導するケースなどもあります。先生も忙しくて、一人ひとりにきめ細かく対応してられないという事情もあるかもしれませんが、**まだまだ外国籍の子どもに対する理解が進んでいないことを感じます。**

文化の違いを乗り越え、居場所づくりを通じて子どもたちがありのままに受け入れられる社会をめざしたい。

プロフィール

小学校3年生(9歳)で家族とともにブラジルから来日、滋賀県で暮らし始める。高校卒業後、近江八幡市教育委員会で相談員として1年間勤務、同じように両親と日本に移り住んだ子どもたちの相談やサポート業務に従事する。その後大学に進学、卒業後は栗東市教育委員会で外国籍の子どもを対象に、日本語指導員として活動、夏休みの日本語教室開催などにも熱心に取り組んでいる。

保護者のみなさんは、忙しくてなかなか子どもにかかわれないのが現状ですか。

私もそうではないかと思っていたのですが、家庭訪問すると子どもたちの将来のことを心配しているし、仕事で忙しい毎を送りながらも、ちゃんと考えている親が多いことがわかりました。

今の日本語指導員という仕事に就かれることになったきっかけは?

大学で国語を専攻したのは、どこかで自分は外国人で日本人より下にいると感じていたので、勉強して見返したいという思いがあったからかもしれません。そしてはじめは教師を志したのですが、自分が本来教えたいことが教えられないと思い、それよりは近江八幡市で相談員を1年間務めた経験を生かして、**学校で外国籍の子どもたちの居場所づくりをしたいとこの仕事を選びました。**

ご自分の名前についてお聞かせください。

名前については、中学、高校と右田春美で通しましたが、高校卒業を機にマリアナという名前を使うようになり、改めて日本の社会で自分という存在を知付かされることになりました。中学、高校時代はブラジル人のルーツを隠したいというより、日本人ばかりの中であってどこかで負けているような気がしたんだと思います。

日本はまだルーツを出すことに対して優しくない社会ですね。

日本人の傾向として、肌が白い外国人には憧れを抱き、黒いと自分より下に見るようなところがあります。外見は、相手への接し方を決める入口として大きいと思います。

現在のお仕事を始められて、自分という存在に自信が持てるようになったではありませんか。

コンプレックスを感じることはしょっちゅうだし、アタマに来ることも毎日あります。ずっと「自分は何なのか?」という葛藤が続いています。もっとありのままの自分を普通に出せる社会になってほしいと思います。

友人との間にも時々ショックなことがあります。「実は私も在日韓国人で…」と打

ち明けてくれた友人ととても親しくなったのですが、「関わりが深くなり過ぎてしんどくなった」と言われてすごくショックを受けました。「日本の社会はそう簡単には変わらないだし、力まないで普通に生きていったほうがいいのでは」と言われましたが、私には**ありのままの自分を隠して生きることが普通なのかと今でも疑問に思っています。**

外国籍の子どもたちに伝えたいことはどんなことですか。

辛いことや自分の無力感を感じることも多いのですが、いつも子どもたちが元気をくれるので助かります。私を頼って電話をかけてきてくれたり、風邪で休んだ私をずっと待っていてくれた子もいます。そんな子どもたちに、**もっと自分に自信を持って誇れるような存在になってほしいと思っています。また自分の名前を大切に、両親のことを隠したりせず尊敬してほしいですね。**

これからやってみたいこと、将来の夢などについて聞かせてください。

いろいろなネットワークや基盤づくりを進めていって、将来はフリースクールのような学校を作りたいというのが私の夢です。学校に来られる子はまだいいのですが、不登校の子どもたちのことがすごく気掛かりです。そういう子どもたちの居場所になる学校を作れたらいいと思っています。

日本の子どもたち、また滋賀県民に何かメッセージはありますか。

外国籍の子どもに対してだけでなく、どの子に対してももっと思いやりの心を持ってほしいですね。子どもは大人の言うことをまねて言っているだけなのだと思いますが、「外人」という言い方はいちばん私たちを傷付けるしんどいことばです。「外人」と書いて「外人」です。あまり知られていないかもしれませんが、差別用語です。人を傷つける言葉なので「外国人」が正しい表現だということを知ってもらえたらと思います。**同じ人としてありのままの私たちを受け止めてほしいと思います。**